

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520872

研究課題名(和文) 楚式鬲からみた楚文化の形成と展開及びその変容

研究課題名(英文) Reserch for historical geography transition of Ancient Chu Culture

研究代表者

谷口 満 (Taniguchi, Mitsuru)

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：10113672

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：楚文化の指標器である楚式鬲を中心資料として、楚文化の形成と展開及びその変容を考察し、楚文化は湖北省・河南省・陝西省三省交界地帯で発生し、その後西周から春秋にかけて漢水西側荆山東麓を南下し、ついで、春秋から戦国にかけてしだいに漢水東側地域に侵入していったこと、楚式鬲の最盛期は春秋中期であり、その後はしだいに周式青銅器を模倣した楚式青銅器が楚文化の指標器となっていたことを明らかにし、この楚文化の歴史の変遷は、西周時代の拠点丹陽は漢水上流に存在し、春秋戦国時代の拠点郢都は湖北省西部荊州地区(紀南城)に存在したという、楚国の歴史地理的推移に正しく対応していることを確認した。

研究成果の概要(英文)：Ancient Chu Culture that had a Chu type Li as culture indicator, was made up in boundary of Hubei Henan Shanxi district at Wwst Zhou Period. That Culture had advanced south along east bottom of Jingshan mountain bit by bit, arrived in Jingzhou area at the early years of Spring-Autumn Period, thereafter penetrated into east area of Hanjiang River, that area fell into Chu Culture hand at middle years of Warring States Period.

Such a historical geograohy transition of Chu Culture corresponds to historical development of Ancient Chu State, that Danyang Capital at Westzhou Period located in the upper stream area of Hanjiang River, and Ying Capital at Spring-Autumn Warring States Period located in Jingzhou area, Jinan City.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：楚式鬲 周式鬲 楚文化発生地 楚族の故郷 楚都丹陽丹江説 楚郢都紀南城説 漢水東側の周文化 楚式鬲から青銅文化へ

1. 研究開始当初の背景

本研究にいう楚文化とは、前11世紀ごろ(西周前期)から前3世紀(戦国晩期)までのおよそ八百年間、中国南方に存続した先秦楚国の文化のことであるが、この先秦時代の楚文化がどこで発生し、どのような経路でもって拡散し、そしてどのように変容していったかを明らかにすることは、資料的にきわめて困難な状況にある。それは言い換えれば、楚国の発祥地、その後の進出経路及びその政治構造の推移といった、楚国の歴史的展開を解明することが、資料的にきわめて困難であるということでもあり、楚国の研究はその文化・歴史の双方において、解明がすこぶる困難な状況におかれているわけである。

今少し具体的にいえば、楚文化といえ、大量の考古資料の発現によって、その様相がかなりの程度明らかになっている戦国時代の楚文化を除けば、春秋時代及び西周時代の楚文化については、そもそも資料が皆無に等しく、楚国の歴史的展開においても、楚国が強大化する春秋中期を境に、その後の資料はますます豊富であるものの、それ以前の資料はやはり皆無に等しい状況にあるのである。

研究代表者(谷口)は、楚史・楚文化研究者の一人として、三十年来、この資料的空白の克服に鋭意とりくんできたが、まずは数少ないながらも残存している文献資料と部分的ながらも発現している考古資料によって、西周時代から春秋時代の楚国の歴史的展開、いわば前期楚国の歴史的展開を跡づけることに専心し、その結果、楚国は西周時代の中ごろに漢水上流地区、現在の陝西省・湖北省・河南省交界地域で建国され、その後湖北省西部＝荆山東麓沿いに南下し、少なくとも春秋時代初期には現在の荊州地区に到達していたとの想定をうるとともに、その春秋時代初期以降の、荊州地区における拠点こそが、都城である郢都、つまり現在の江陵紀南城遺跡に他ならないとの想定を有するに到った。

そうなる、歴史的展開についてこのような想定がえられた以上、この想定を楚文化の形成と展開及びその変容の過程と照合する必要が当然生じてこざるをえない。もちろん西周時代～春秋時代の楚文化に関する資料はほとんど皆無という状況なのであるが、ただ一つだけその資料価値を発揮すると予想される考古遺物が存在する。それがいわゆる楚式鬲である。楚式鬲は楚国領域内にしか見られない楚国特有の陶器であり、まさしく楚文化の指標器なのであるから、その発生地、その拡散経路及びその変容の過程は、歴史的展開についての上記の想定に、必ずや対応しているであろう。

そこで研究代表者(谷口)は、十年来楚式鬲及び関連する考古資料の収集と整理に鋭意つとめてきたのであるが、南水北調工程などの大型土木プロジェクトなどにもなう考古発掘の進展によって、ここ数年間に楚式鬲の発現が飛躍的に増加し、歴史的展開につ

いての想定を、楚文化の形成と展開及びその変容の過程を照合させるという作業に、本格的に取り組むことが可能な段階に、ようやく達したと判断されるに到ったのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、楚文化の典型的な指標器である楚式鬲を主要資料として、楚文化の起源地と形成の様相、及びその後の拡散状況と変容の様相を、楚国の歴史地理的展開に照合させつつ考察しようとするところにある。ことに従来、資料的制約から未着手のままで放置されがちであった、西周時代における楚文化発生地の特定と、その発生メカニズムの解明、及び以降春秋時代中期にかけてのその歴史地理的展開の復元を、集中的かつ詳細に実施しようとするものである。

3. 研究の方法

漢水上流＝丹江流域一帯 襄樊地区
湖北省西部荊州地区 湖南省北部中部・湖北省西南部と、北から順に、出土している楚式鬲及び関連陶器・関連遺跡を網羅的に収集・整理し、楚式鬲の拡散経路が漢水上流から湖北省西部荊州地区へ、つまり北から南へであることを確認する。

周式鬲から楚式鬲が発生してくるメカニズムを、同一遺跡における陶鬲の変容様相によって考察する。

湖北省東部＝漢水東側の楚式鬲出土状況を整理し、楚文化の進入時期において、この地域がもっとも遅かったこと、つまりもっとも遅くまで周文化が残存していたことを確認する。

楚国の発祥地・楚文化の発生地は漢水上流＝現在の陝西省・湖北省・湖南省交界一帯であることを、清華大学所蔵竹簡「楚居」をはじめとする、楚式鬲以外の資料をもって傍証づける。

江陵紀南城遺跡は春秋初期から機能しており、それは楚国の都城郢都の遺構であったことを、考古資料によって再度確認する。

楚式鬲の最盛期は春秋中期であり、それ以降衰退し、これにかわっていわゆる楚式青銅器が流行してくることを確認し、それはすなわち、第一次楚国＝第一次楚文化から第二次楚国＝第二次楚文化への変質に対応していることを確認する。

殷式鬲・周式鬲・楚式鬲の作製方法を典型器のサンプルを整理して復原し、殷式鬲・周式鬲は当初から器体と足部を同一胎土で作成したこと、これに対して楚式鬲は、当初器体と足部を別個に作成し、その後これを接合したこと、つまり、殷式鬲・周式鬲から楚式鬲への変換には、器形・紋飾の変容だけではなく、その作製方法において本質的な転換があったことを確認する。

楚式鬲が単なる日用器副葬品ではなく、青銅祭祀器具と同様、祭祀器具として副葬された可能性を、副葬品の組み合わせ状況から

検討する。

4. 研究成果

楚式鬲発生地の確定。

湖北省鄭県・十堰市、河南省西南部浙川県・南陽市、陝西省商洛市・商南県などで、出土している西周陶鬲を現地調査し、西周時代前期は周式鬲が主流であるものの、西周時代中期になると突然周式鬲とは異なった陶鬲が出現するようになり、それは器形からして明らかに楚式鬲の範疇に属すること、こういった事情はこの陝西省・湖北省・河南省交界一帯でもっとも早くみられることを確認し、楚式鬲の発生地、つまり楚文化の発祥地はこの一帯に他ならないことを明らかにした。

具体的にいうならば、漢水の支流丹江流域に位置する商南県過鳳楼遺跡に代表される過鳳楼類型文化こそが、もっとも原初的な楚文化であり、その後漢水上流の各地に拡散して、漢水沿岸の鄭県遼瓦店子遺跡に代表される遼瓦店子類型楚文化を生み出したことを、明らかにしたのである。

この見解は、過鳳楼類型文化に関する専論を公表している陝西省考古研究院の張天恩氏の意見に導かれて、西北大学趙叢蒼教授・現地商洛博物館王昌富館長・襄陽市文物考古研究所陳千万研究員などと、商洛博物館において過鳳楼遺跡出土の遺物を実見して得られたものであり、趙教授・王館長・陳研究員の意見ももちろん同じであることはいうまでもない。

楚式鬲発生メカニズムを解明。

襄陽市の余崗遺跡・黄集小馬家遺跡・陳壩遺跡、宜城市の肖家嶺遺跡・郭家崗遺跡など、漢水上流襄陽地区西周時代・春秋時代墓葬から出土している陶鬲を現地調査して、楚式鬲は、従来から周式鬲を保持していた集団が、みずから自生的に生み出したのであり、他所からの移住者といった、外来者によって持ち込まれたものではないこと、言い換えれば、楚族の人々は本来周系文化の保持者であったが、その後自身で独自の文化、つまり楚文化を創造するようになったのであり、周式鬲から楚式鬲への転換は、楚族の人々のいわば自己変革の結果であることを確認した。

この見解は、襄陽市博物館王先福館長をはじめとする襄陽地区考古研究者に共通する見解でもあり、その後も新しい考古資料をえて、その正しさがより強く証明されつつある。

楚式鬲拡散経路の復元。

楚族の人々は西周時代中期から西周時代後期にかけて、丹江流域 丹江・漢水合流点一帯 襄陽地区と、漢水上流をくだいて南下したと考えられるが、その後の経路については、襄陽地区から湖北省東部＝漢水東側には東南下せず、襄陽地区から宜城 荊門と、湖北省西部＝荊山東麓一線を南下していったことを確認した。

もちろんこれは楚式鬲の出土状況から導

きだされた結論であるが、その理由として湖北省東部＝漢水東側には、当時、鄧・曾（随）などの周系諸侯が割拠しており、楚国がここに進入していくことは容易ではなかったこと、対して湖北省西部＝荊山東麓一線には強力な政治勢力が見あらず、楚国勢力の南下が比較的容易であったことを想定した。

湖北省東部＝漢水東側は、隨棗走廊（随州 棗陽）と呼ばれる南北交往の幹線ルートであるが、春秋時代から戦国時代にかけて長江中流域の各地が楚国に次々と掌握されるなかで、ここが楚国に組み込まれるのは、はるかにさがつて戦国時代中期をまたねばならなかった。いいかえれば西周時代前期から戦国時代中期まで、この地域はほぼ一貫して周系諸侯・周文化の占領区であったのであり、そしてその政治力・文化力は楚国の圧力に抗して、より遅くまでしかもより強く継続されたことが確認されたのである。この想定は、ここ二、三年来の間に発見をみた、随州曾國墓葬などの新考古資料によって、その正しさがより一層の確度で証明されつつある。

楚文化＝楚国政治勢力が荊州地区に到達した時期の確定。

当陽趙家湖遺跡・江陵兩台山遺跡など、代表的な荊州地区楚国墓葬遺跡から出土する楚式鬲の年代を精密に考察して、そのもっとも古い者は、西周時代・春秋時代交代期のものであること、つまり、楚文化は、少なくとも春秋時代初期には荊州地区に到達していたことを確認した。

この見解は、当該地区楚式鬲の年代を西周時代中期にまで引き上げる一部の意見に訂正をせまるものであるとともに、当該地域が楚国の領域となるのは戦国晩期をまたねばならないとする一部の意見にも訂正をせまるものとなった。

また、この見解を得るに到ったおりしも、楚国の祖先伝承が記録された出土文字資料である清華大学所蔵竹簡「楚居」が公表され、鋭意解読した結果、その内容はまさしくこの見解を証拠づけていることが明らかになった。すなわち、「楚居」の内容による限り、楚族は西周末期にはすでに荊州地区の北部にまで到達していたこと、したがって、春秋時代に入って最初の楚王である武王の時には、当然荊州地区の中心部に到達していたことにならざるをえないのである。

文献伝承は武王の時に都城郢都を建設したことを伝えているが、その位置をめぐることは、甲論乙駁の激しい論争が繰り広げられている。しかしながら、考古資料＝楚式鬲と出土文字資料＝「楚居」によって、春秋初期武王時期に荊州地区中心部に到達していたことが確実となった今、その郢都の位置は荊州地区中心部、つまり江陵地区において他はないことになり、そうであれば、それは江陵紀南城遺跡でなくてはならない。この意見は、年来の論争に最終的な決着をつけるものであり、本研究におけるもっとも重要な成果の

一つであると自己評価している。

楚式鬲の変容過程の復元。

楚式鬲の出土状況を年代ごとに整理・比較して、楚式鬲の最盛期は春秋中期であり、その後しだいに衰退していき、代わっていわゆる楚式青銅器が流行してくることを確認した。楚式青銅器とは、器形・紋飾・製法において周系青銅器のそれを受容しながら、その三者の一部において楚国特有な点をもつものをいうのであるが、しかし、その本質においては黄河流域青銅器文化の範疇に入るものであることはいうまでもない。

すなわち、周式鬲 = 周系文化から脱却して楚式鬲 = 楚文化という独自の文化をうちたてた楚国の人々は、のちにはかえって楚式鬲 = 楚文化を脱却して楚式青銅器 = 周系文化の一類型をもつようになるのであり、それは楚国がしだいに、周王朝など、黄河流域諸国型の国家に変質していったことを示している。いずれにしても、同じ楚国の文化とはいえ、前者と後者は区別されるべきであり、前者は第一次楚国 = 第一次楚文化、後者は第二次楚国 = 第二次楚文化と呼ぶのがふさわしいことを、学説として提示した。

楚国 = 楚文化の湖北省東部 = 漢水東側への進入経路の復元。

文献伝承は、春秋時代前期から順次、楚国が漢水東側へ軍事的侵略を試みていたことを伝えているが、その具体的な内容、具体的な進入経路は明らかになっているわけではなかった。

この問題の解明のために、湖北省中部・東部の楚式鬲を網羅的に収集して整理・検討したところ、楚文化の進入経路は、漢水下流 = 武漢地区から随州地区へ、つまり漢水東側を北上するルートが主要ルートであり、襄陽地区から棗陽地区へ、つまり漢水東側を東南下するルートは、副次的なものに過ぎなかったことが明らかになった。

そして、漢水下流 = 武漢地区が楚国 = 楚文化の占領区となった年代については、孝感市孝昌武家崗遺跡などの楚式鬲によって、春秋中期から晩期にかけての時期であることを確認した。

楚式鬲の作製方法の復元。

襄陽市文物考古研究所王先福研究員の研究によりつつ、楚式鬲の作製方法は、当初器体と足部を別個に作製し、その後これを接合するという、殷式鬲・周式鬲など、黄河流域の陶鬲にはまったく見られないものであることを一応確認した。

ただし、サンプルによっては不確定なものも多く、この見解を学説として提示するためには、さらに多くのサンプルを検証することが必要であり、今後の課題としなければならない。

楚式鬲の祭祀器具機能の検討。

楚墓から出土している楚式鬲は通例“日用陶器”と分類されている。それは、死者が生前使用していた日用器を、死後も使用できる

よう副葬したものだという前提に立っており、同じく副葬品であっても、青銅容器など、生前の祭儀にあるいは葬儀の際に使用された祭祀器具とは、はっきり区別されているのである。

しかし、副葬されている陶鬲はすべて日用器であり、祭祀用具の機能をもっていたものは一つもないかといえ、おそらくそうではないであろう。祭祀器具である鼎の代替物として副葬されている例が、ありそうなのである。

鋭意、検討を加えた結果、襄陽地区春秋楚墓などのサンプルについて、それが祭祀器具として副葬された可能性の高いことを確認した。ただし、この意見を学説として提示するには、さらに多くのサンプルを検証することが必要であり、今後の課題としなければならない。

楚国 = 楚文化と巴国 = 巴文化の関連についての検討。

楚国の発祥地、楚文化の発生地が陝西省・湖北省・河南省交界一帯であることを確認してみると、実はこの一帯のごく付近である漢水上流荆山北麓が、実は巴国の発祥地であり、巴文化の発生地であった可能性に注目せざるをえない。

そうだとすると、楚族と巴族は本来そうとうに似かよった文化的伝統・民族的伝統をもっていた種族であったと考えられるが、考察の結果、両者はともに虎崇拜と鼈崇拜を有する、文化系統・民族系統において深い親縁性をもつ種族であったことを確認することができた。

春秋戦国時代における楚国 = 楚文化と巴国 = 巴文化の様相のなかに、時として共通の要素を見いだすことができるのはそのためであり、この事実は、両者の歴史・文化の研究のみならず、先秦時代における諸民族と諸文化の動向を全体的に研究する上で、きわめて重要な示唆になるであろう。

本研究においては副次的な成果であるけれども、先秦史研究に重要な提示を行い得たものと自己評価している。

以上 ~ の成果を要するに、本研究の主要課題である楚文化の形成と展開及びその変容の解明についていえば、次のような成果を提出しえたことになる。

- 一. 楚文化の発生地は陝西省・湖北省・河南省交界一帯であり、その発生時期は西周時代中期である。より限定すれば、原初の発生地は陝西省東南丹江流域であり、その後、漢水上流郟縣一帯に拡散した。
- 二. その後、西周時代後期にかけて、漢水上流襄陽地区に南下した。
- 三. その後は湖北省東部 = 漢水東側に東南下することなく、湖北省西部 = 荆山東麓一線を南下し、少なくとも春秋初期には荊州地区中心部に到達した。
- 四. 春秋時代初期の武王が建設した都城郢

都は、江陵紀南城遺跡がそれであり、ここに漢水西側のほぼ全域を領域とする楚国が成立し、楚式鬲を指標とする楚文化、いわば前期楚文化が展開した。

- 五. 春秋時代中期から後期にかけて、楚文化は荊州地区から東進し、少なくとも春秋時代後期には漢水 downstream = 武漢地区に到達した。こうして、楚文化は漢水東側を北上して、そこに最後まで残っていた周文化圏に進入していくことになる。
- 六. 以上のような過程のなかで、春秋時代中期をピークとして、楚式鬲はしだいに衰退し、代わって周系青銅器を継承しながらも独自性を付与された楚式青銅器が流行するようになり、ここに楚式青銅器を指標とした、いわば後期楚文化が展開してくることになる。これは楚国が黄河流域諸国型の国家に変質していったことを示しているのである。

以上の研究成果は、後掲の研究論文や学会発表で公表したのはもちろん、研究情報の交換を通じて、中国国内の関連研究者に広く公開している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5件)

谷口満「試論清華簡《楚居》对于楚国歴史地理研究的影響」、四省楚文化研究会編『楚文化研究論集』第十集、pp23~30、2011年。

谷口満「襄陽再訪記 襄陽・老河口・穀城・宜城に楚式鬲を訪ねて」、東北学院大学『アジア流域文化研究』、pp23~40、2012年。

谷口満「談談奉節永安鎮与 fu 陵小田溪出土的珍奇巴文化青銅器」、夔州文化及重慶歴史地理專業委員会編『第六屆年會論文集』、Pp523~527、2012年。

谷口満「清華簡楚居の発現と楚国歴史地理研究」、東北学院大学論集『歴史と文化』第四九号、pp1~37、2013年。

谷口満「巴族的故郷与楚族的故郷」、西南大学歴史地理研究所編纂『巴文化研究特集』、Pp1~3、2013年。

[学会発表](計 5件)

谷口満「試論清華簡《楚居》对于楚国歴史地理研究的影響」、四省楚文化研究会第十二次年會、中国武漢市湖北省文物考古研究所、2011年10月27日。

谷口満「范蠡伝説的背景」、襄陽市文物考古研究所特別講演、襄陽市文物考古研究所、2012年12月12日。

谷口満「清華簡楚居の発現と楚国歴史地理研究」、中国出土資料学会例會、成城大学、2012年12月8日。

谷口満「關於巴史巴文化研究方法的幾点思

考、六省(市)巴文化研討會、中国重慶市巴人博物館、2013年12月20日。

谷口満「關於清華簡楚居的幾点思考」、武漢大学簡帛研究中心特別講演會、武漢大学簡帛研究中心、2014年3月11日。

[図書](計 0件)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称:

発明者: 権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷口 満 (TANIGUCHI Mitsuru)

研究者番号: 10113672